

ヘーゲルはいかなる意味で実在論者と言えるのか

マクダウェルのヘーゲル読解を手掛かりに

久保篤史(京都大学)

「実在論」という語は多義的である。対義語の取り方ひとつひとつも一様でない。観念論、反実在論、唯名論、規約主義、構成主義など、議論の文脈に従って実在論には多くの対義語がある。したがって、「誰それは実在論者である／ない」と言う場合、その際に意味されている「実在論」があらかじめ明確に画定されていなければならない。本発表では、ジョン・マクダウェルが唱える「実在論」の立場に注目し、この立場と同じ意味でヘーゲルが「実在論者」と言えることを示したい。

マクダウェルがヘーゲルに共感を寄せていることは彼の主著『心と世界』以来、マクダウェルに多少なりとも関心をもつ者の間ではよく知られていると言っていい。しかしながら、英米圏のヘーゲル研究潮流の一翼を成して、ピッツバーク学派として彼としばしば並び称されるロバート・ブランドムに比べると、マクダウェルのヘーゲル解釈に関して立ち入った考察がなされることは稀であり、ヘーゲル研究者がマクダウェルを扱う場合にも、概して知覚の場面に定位しがちである。こうした傾向に対して本発表はマクダウェルの行為、ひいては共同体の議論に注目し、彼がヘーゲルを直接論じた数少ない論考のひとつである『『現象学』「理性」章における行為に関するヘーゲル読解に向けて』を取り上げたい。

この論考は題目にある『精神現象学』「理性」章の解釈をめぐる、今日の英米圏のヘーゲル研究で最も著名なロバート・ピピンを論敵として展開されている。ピピンは、人倫ないし共同体を心に非依存的で固定的な所与だと捉える立場を「実在論」と指定したうえで、これに対抗する構成主義の立場をとる。こうしたピピンの論陣に対してマクダウェルは、ピピンが想定する通俗的な「実在論」理解は狭きに過ぎ、通俗的に理解されるのとは「違った種類の実在論 a realism of a different kind」があるはずだと述べる。彼はそうした見通しのもとに『精神現象学』の当該箇所を概観していく。

本発表は、哲学上の立場としてもヘーゲルのテキスト解釈としても、マクダウェルのこの論考に大枠において賛意を表する。だが、二つの問題点を指摘しないわけにはいかない。第一の問題点は、彼が言うところの人倫ないし共同体に関する「違った種類の実在論」の実態が少なくともこの論考のなかだけでは曖昧であることであり、第二の問題点は、彼のヘーゲル読解の基本線が結果として妥当であるとしても、それを説明する言葉遣いがヘーゲルから離れているため、一見してヘーゲル解釈としての妥当性が検討し難いということである。いずれの問題点もある意味でテクニカルな指摘に過ぎないが、こうした論点を提示して展開することには以下の二つの意義がある。

第一に、ひとつの魅力的な哲学的立場としてのマクダウェル哲学の明確化に資するだろう。マクダウェルは主著『心と世界』において知覚と行為をあくまで同等な論題として扱っているにもかかわらず、彼自身が前者の議論に過剰な紙面を費やしたこともあってか、先に述べたように後者の側面はなおざりにされてきた。無論、倫理学の方面からのアプローチはあるものの、共同体に関する「実在論者」としてのマクダウェルを表立って論じることは少なく、その意味で本発表には一定の新規性が認められる。

第二の意義は、マクダウェルを迂回することによって、ヘーゲルが『精神現象学』理性章で提示する人倫ないし共同体の存在者としての規定を、従来のヘーゲル研究とは違った視点から検討することができることである。マクダウェルは先ほど挙げた論考において、彼自身の「実在論」は、共同体の実践に入り込んで理性・理由に応答できる人間が「単なる生物学的個人」ではなく「形而上学的に新しい種類の存在」であると述べ、この考えをヘーゲルのテキストにも読み込んでいる。本発表は、恣意的にも映るこの読み込みが、『精神現象学』における術語のひとつである「カテゴリー Kategorie」を介することにより、結果として正当なものであることを示す。すなわち、ヘーゲルとは無関係に築かれたであろうマクダウェルの「実在論」は、一定程度ヘーゲルの考えに重なっているのである。こうした角度から翻ってヘーゲルを「実在論者」として捉え直すことができるだろう。

以上を踏まえ、本発表は以下のような構成をとる。まず、一般に「実在論」はどのような立場とされているのかを簡潔にまとめる。これは「実在論」という語を正確に使用するために必要な準備作業である。本発表で特に重要なのは、観念説における「実在論」と存在論における「実在論」の区別である。次に、マクダウェルの存在論上の立場としての「違った種類の実在論」がいかなる内実を持つのかを『心と世界』をはじめとする著作・論考を参照しながら再構成し、その「実在論」が、ピピンが想定する通俗的な「実在論」とそれに対抗する構成主義の双方とどのような相違点があるのかを提示する。最後に、マクダウェルが『精神現象学』理性章に関して非ヘーゲル的に語る内容が、マクダウェル自身がどこまで意識しているかはともかくとしてヘーゲルの主張に合致するものであることを明らかにする。これにより、少なくとも『精神現象学』理性章に関してヘーゲルの立場が人倫ないし共同体に関する「実在論」であることを明らかにする。

参考文献

川瀬和也 (2018). 「自然的かつ「独特」な概念能力——マクダウェルの「第二の自然」の批判的検討」『宮崎公立大学人文学部紀要』第25巻第1号。

倉田剛 (2020). 「いかにして社会種の実在性は擁護されるのか——「実在論的」社会構築主義についての試論」『哲学』第71号。

マクダウェル, ジョン. (2012). 『心と世界』(神崎繁ほか訳), 勁草書房。

McDowell, J. (2009). *Having the World in View*, Harvard University Press.

——, (2009). *The Engaged Intellect*, Harvard University Press.